

ペットの皮膚病の悩みをズバリ解決！

《今回のテーマ》「アトピー性皮膚炎における減感作療法」

本治療法は、ステロイドやシクロスポリンを使用してアトピー性皮膚炎の症状を抑えていく対症療法とは違い、根治を目指す治療法です。即ち、適切な診断且つ検査を元に、患者自身何のアレルギーであるのかを明確にし、そのアレルギー物質（抗原）を少しずつ注射して、免疫反応を鈍くさせるものであり、対象患者としては、アトピー性皮膚炎の診断が適格であることを前提条件として以下の項目に当てはまるケースになります。

＜対象条件＞

- ・9才以下である
- ・アレルギー検査において現実問題として避けられない抗原に反応がある
- ・対症療法ではコントロールが難しい etc...

次に、実際の減感作療法においてどのようなスケジュールで行われるのかを概説します。

スケジュールは一般に導入期と維持期の二期に分けられます。しかしながら現段階で獣医学における明確な減感作療法のプロトコールは未だ存在しません。そのため、各獣医師により数多くのバリエーションがあるため職人技といっても過言ではない。近年従来の減感作療法に加えて導入期のスケジュールを数日で完了させる急速減感作療法（ラッシュイミュノセラピー）もいくつか紹介されていますが、安全性の問題や効果の有無を示したエビデンス（根拠）が無いため、当院では従来の減感作療法に基づいて治療を実施しています。

我々の減感作療法では導入期に約一カ月、維持期に通常一年を要して行われ、最初の効果判定を治療開始後三カ月で行います。この治療の実施に当たっては、インフォームドコンセントが重要で患者、飼い主、獣医師の三人三脚の協力が不可欠となります。減感作療法の実際として、どの時点で効果が有ったと判断するかは、難しい点ですが、今までステロイドを10飲まなければ、痒みが抑えられなかったものが、3飲めば十分に痒みが抑えられたとします。これは、減感作の効果有りと判断します。勿論、ステロイドフリーになる可能性も有ることは強調したい。又、全ての患者にこの療法が当てはまる訳では決していないため、上記に記した条件以外にも個々に調整して今後の治療方針を決定していく事が必要でしょう。



皮内反応試験により患者自身のアレルギーを特定し、減感作療法の準備とする。本症例では日本スギを始めとした多くの花粉に反応していた。又、患者が愛用していた綿毛布にも強陽性を示していたため、直ぐに除去して貰った。

《10月号予告》

10月号では

猫のアトピー性皮膚炎 におけるアレルギーテストと 減感作療法

を取り上げて、アトピー性皮膚炎に対する最新治療をご紹介します。



減感作療法に入るとステロイドは極力使いたくないため、治療途中の痒みを抑えるため、シクロスポリンを当院では好んで使用している。写真の様に動物用でアトピカ<ATOPICA>、人体用でネオーラルやネオメルクが存在する。



減感作プログラムと減感作用抗原を調査して、注射器に用意したもの。基本的に飼い主さんに接種は行っていただくため、プログラムを予め渡しておき、接種確認のために随時、添付したステッカーを貼って貰う。